

登山料という言葉を知ったのは1970年ネパールヒマラヤのアンナプルナIII峰（7555メートル）に登った時でした。

山に登るために、その国に入山料を支払うのだ、とちょっとびっくりしたのを覚えています。日本の山に登るのにお金を支払うという感覚は当時私には思いもつきませんでした。

山に自由に入入りし、川の水を飲み、帰りは山菜やきのこなどの恵みをちよつと頂戴し、夕食時に歩いた行程や風景を思い出しつつ山の恵みを味わって、これが当たり前と思っていました。

1975年当時、エベレストの入山料は確か1000ドル（36万円）でした。（今では2万5000ドル？）1シーズン1隊にしかエベレストへの登山許可が出なかった時代のこの入山料が高いのか、安いのか、私たちには見当がつきませんでした。

しかし、エベレストのベースキャンプに着くまでのキャラバンは実にはのしかつたですね。15トンの私たちの荷物を運んでくれる600人のポーターたちと一緒に歩き、休み、笑い、飲み、歌い、言葉こそ違つても、「荷物たのんだよ」「よっしゃ、まかせておけ」という山での同志のような絆が築かれていました。村を越え、谷を越える約1カ月にわたるベースキャンプまでの歩きで、登山そのものの前の助走ともいうべきこのキャラバンがいかに大事か、ということも知りました。

8000メートル級の山へ登る前に体も心も整えるための重要な期間だったのです。

山をたのしむ

登山家 田部井 淳子

5350メートルに築かれたベースキャンプでは緑が全くない、氷河上での生活です。通ってきた村で購入したキャベツやブロッコリーに、「わぁー。緑だ」と感激し、日本に帰ったら東北の山へまず行こうね、とか、信州の山に行こうね、という話がテントの中でいつも交わされていました。

事実ヒマラヤへ行ったおかげで、日本の山々がいかに素晴らしいかを実感できたと思います。多種多様な樹木に覆われ、高山植物が咲き、北海道から沖縄まで、変化に富んだ山河があり、四季を持つ日本の山々ほどの国にもない美しさです。

中高年の方たちが百名山を目指し、山ガールと呼ばれる若い女性たちも山に興味を持ち、山をたのしみ始めたことは私はよろこばしいことだと思っています。が、人数が増せば山への環境が変わってくるのも事実です。トイレや水場や山小屋のあり方も変わってきました。昔、山へ入るのも、川の水を飲むのも、「ただ（無料）」と思っていた時とは違い、美しい日本の自然を守り続けるために、環境費としてのお金を支払う必要性も私は感じています。山で元気をもらい、次への活力を得て帰れる費用と考えれば安いと思います。

エベレストから40年を経た今、日本で入山料が検討されるようになり、改めてヒマラヤへ登る時に支払った費用のことを思い起こしました。

（たべい じゅんこ）